

道徳部会

<県研究主題>

生きる力としての豊かな人間性をはぐくむ道徳教育の指導及び評価の工夫・改善

提案 1

提案者 小路 成明（湘南三浦地区）

<研究主題>

本音で語り合う道徳教育の実践

1 提案内容

学習指導要領の改訂に伴い、道徳教育の充実を図るために片瀬中学校での三つの取り組みが提案された。

(1) 研究の概要と実践

提案の一つ目は、「本年度までの取り組みの過程及び道徳教育推進教師としての関わり」。二つ目は、読み物教材を使った「道徳授業の進め方」。三つ目は、道徳の時間で生徒の考えをより深めるための本音を出し合える「学級づくり」についてである。

①一つ目の提案：「平成21年度からの取り組み過程」について

ア 平成21年度 《準備をしよう》

道徳教育全体計画・各学年の年間指導計画の見直し・整備等を行った。また、読み物教材として県の道徳副読本「きらめき」を次年度から各学年で使用することを決定した。

イ 平成22年度 《学校の課題を解決していこう》

「きらめき」を読み物教材として購入し、年間35時間の道徳の時間を「きらめき」を中心に実施した。年度末には「きらめき」の使い方がよくわからなかったという反省が出た。

ウ 平成23年度 《全員でやろう》

前年度の反省を受け、道徳の校内研修会を5回計画・実施した。研修会の内容は、石田直樹先生（相模原市立相陽中学校教諭：「きらめき」編集長）による模範授業と研究協議・各学年一名ずつによる研究授業と研究協議・全学級での「きらめき」を使った道徳の公開授業などである。反省として、「生徒に価値観の違う意見を出させて授業を展開することが難しい。」や「生徒の本音を出し合える雰囲気がまだ弱い。」などが出てきた。

エ 平成24年度 《本音で語ろう》

共通理解を持って道徳教育に取り組めるよう、4月に着任者・新任者に対してのOJT研修で「道徳教育について」を行った。また、前年度の反省を受け、授業公開と併せて「学級における望ましい仲間作りと道徳教育の充実に向けて」の演題で研修会（講義）を実施し、「学級づくり」という観点からの研修を行った。（講師は石田直樹先生）

オ 平成25年度 《止まらずに行こう》

道徳教育推進教師が、各クラスの道徳の授業を参観して回ったり、担任の代わりに授業をやったりするなどして、担任の「授業に対する疑問や困っていること」を聞き、研修を深められるよう取り組んでいる。

②二つ目の提案：「読み物教材（きらめき）を使った授業の進め方等」について（概略）

<授業の進め方> 机の配置は「コの字型」の隊形を原則とする。

ア 範読は必ず教師が行う。 イ 板書は主人公との関係を基にポイントを押さえる。

ウ 資料のねらいや初発の感想を基に意図的に生徒を指名する。

エ 教師がしゃべりすぎないようにする。(授業を進めていくのは生徒の意見)
オ 徳目を教え込もうとしない。話し合いが深まれば自然とねらいに沿って真剣に考えていく。
<生徒に対する迫り方>

ア 話し合いは「主人公の言動」に焦点を絞る。話題が散漫になることを防げる。
イ 価値観の違う意見を対立させていく。 ウ 感想を書かせる中で、授業の振り返りをする。

③三つ目の提案：本音を出し合える「学級づくり」について（概要）

<日常の学級指導における望ましい人間関係づくりのポイント>

ア 個々の生徒が、自己肯定感や自己有用感を持っている学級
イ 目標や実践に向かう意欲を持つ学級
ウ 生徒が納得し果たすべき役割を自覚している学級

(2) 研究の成果と課題

成果の一つは、道徳の時間が「お互いの存在を認め合える大切な時間になってきた。」ということである。学校が落ち着いてきた要因の一つが道徳の時間であると考えられる。

今後の課題は、今年度までの取り組みを継続していくことと、教材を把握し全体をリードできる道徳教育推進教師を育てていくことである。

2 協議内容

質義応答のあと、「学校全体で取り組む道徳の時間」を協議の柱として協議が行われた。

(1) 質疑応答（抜粋）：

- Q：「きらめき」には使いにくい資料もあるが、どうしているのか。
→A：解説や補足説明をするなどして対処している。「きらめき」以外の読み物資料も使っている。
- Q：道徳の時間を席替えなど他の事に使うことはないのか。
→A：ない。「きらめき」を使っていない担任はいる。
- Q：推進教師で担任だった時と担任外になったときの違いはあるか。
→A：担任の時は若手教員の授業を見るための時間調整が大変だった。
- Q：年7回のOJT研修はどのように実施しているか。
→A：道徳も含め各分担の代表教員が若手教員向けに研修を実施している。

(2) 協議（参加者からの意見）：

- ・学校や学年の現状を考慮して、読み物資料を選定している。
- ・職員の道徳研修や外部からの講師による模擬授業を実施している。

3 まとめ

学習指導要領（平成20年9月発行）もすでに古くなっており、生徒の実態は変化している。人として当然わかっているだろうという思い込みは通用しない。「本音で語り合う」ことなど道徳の時間で教えていくことが必要である。また、若手職員への研修も含め「やらなくてはいけない道徳の授業」から「やって楽しい道徳の授業へ」という意識の転換をする必要がある。

生徒の実態に合った資料選定も必要だが、24の項目を網羅することが大切である。その意味でも「きらめき」は有効な資料の一つである。

また、学校として継続した三年間の積み上げが大切である。それには道徳教育推進教師の役割が重要である。推進教師を中心に各校で道徳教育推進の組織を工夫することも必要である。「道徳が好きな教師」を育てていくことが、「道徳が好きな生徒」を育てていくことにつながる。

＜研究主題＞

生徒の横糸を紡ぐための道徳授業の工夫について

1 提案内容

横須賀市立田浦中学校では、横須賀市より平成23・24年度はフロンティアAの研究委託を受け、「心の活力と豊かさを育てる～思考力、判断力、表現力を高める道徳教育～」という研究テーマで道徳教育に視点を置いた研究を進めてきた。また、平成25・26年度はチャレンジBの研究委託を受け、「生徒の横糸を紡ぐ授業の創造～学び合いの授業の推進～」というテーマで、道徳教育から発展させた研究を推進しているところである。ここでは、話し合い活動など、生徒がお互いに学び合う活動を「生徒の横糸を紡ぐ」活動ととらえ、「道徳の時間」の実践を中心に提案する。

(1) 平成23・24年度の研究から

「道徳の時間」の授業の工夫として、次のようなことを行った。

- ① 授業に深まりを持たせるためには授業につながりを持たせることが大切であると考え、月ごとにテーマを決めた。授業につながりがあるので、「前はこう思ったが今回はこんなふうにも思った」といった単発の授業にはなかった深まりが生まれた。
- ② 6月は「いじめ」、9月には「平和」をテーマにして、全校統一教材（共通テーマ）による道徳の授業を実施した。全校で取り組むことにより、道徳の授業に対する意識が高まると同時に、「いじめ」や「平和」の概念や本質的なところまで深く追求することができた。
- ③ T・Tで授業を行ったり、ビーイングの手法を取り入れたりするなど、さまざまな試みを行った。T・Tの授業では、道徳の時間に導入する難しさが浮き彫りになった半面、生徒の見取り、発表意欲の向上には効果があった。ビーイングでは生徒同士のコミュニケーションが深まり、他を思いやったり、全体のことを考えたりする手立てとなった。
- ④ 学年末に、一年間の道徳の時間を振り返り、印象に残った授業や今の自分に生かされていることなどを考える時間を設定し、生徒の振り返り（ポートフォリオ）を実施した。道徳の授業の意味を再認識するとともに、自分自身の成長を振り返るよい機会となった。
- ⑤ DVDや読み物教材、資料などを整理し、職員室内に道徳の教材ライブラリーを設置した。職員室の決まった場所で教材や資料を一括管理することによって、道徳の授業に対する教材研究をしやすい環境を作るとともに、資料の充実に努めた。

(2) 平成25年度の取り組みから

「生徒の横糸を紡ぐための道徳授業の工夫」として、次のようなことに取り組んでいる。

- ① 話し合い活動で意見交換しやすいような葛藤資料の発掘に努め、教材を選定する。
- ② 学年単位で資料を検討し、授業のねらいや授業展開、ワークシートなどを検討する。
- ③ コの字型、班・小グループ、意見による座席移動など座席配置を有効に活用する。
- ③ 生徒の話し合い活動がしやすいようにさまざまな教具を工夫し、有効に活用する。
- ④ 初読感想を提示する、授業後の感想を学級通信で共有するなど事前事後指導の充実に努める。
- ⑤ 授業や話し合い活動に関する生徒へのアンケートを実施し、その結果を活用する。
- ⑥ クラスづくりの重要性、その中で道徳の授業の果たす役割について再認識する。

→「生徒の横糸をどう紡ぐか」

(3) おわりに

- ① 教師、生徒ともに、道徳の授業に対する意識がたいへん高まったこと、道徳の授業で研究してきた概念を教科指導の中で生かそうとしていること、道徳の研究を通して、組織的、計画的に取り組もうとする体制が生まれたことが、研究の成果として挙げられる。
- ② 経験値がさまざまに毎年異動もある教師集団の中で、継続して道徳教育を維持・発展させていくためには、より機能的な組織や体制を作ることが必要である。今後は教師間でいかに手法や技術を共有し、互いを高め合おうとする意識や姿勢を培うかとともに、指導のベクトルを一致させていく方策を探ることが課題となってくる。

2 協議内容

- (1) 授業形態と座席配置について提案校では、道徳の時間の座席はこれでということではなく、通常の授業の配置、コの字型、班・小グループ単位、意見によって座席を移動させるなど、学級担任ごとに扱う教材や授業の展開に合わせて柔軟に対応している。話し合いの中では、いろいろな授業形態を使い分けていくことの有効性が指摘される一方で、「道徳の時間はこうだ」というような、ある程度パターン的なものがあると生徒も発言しやすく、話し合い活動も活発になっていくという考え方もある。そこで、授業形態や授業展開に対する「慣れ」というのも必要なのではないかという意見も出された。学校全体で同じ形態をとるかどうかは別として、道徳の時間において授業形態の工夫はとても重要だろう。そして、さまざまな学習形態に対応できる力は、道徳の時間だけでなく学級の話し合い活動や教科指導の中でも生きてくるものであり、学年・クラスが変わっても変わらない財産ともなるものでもあるという意見も出された。
- (2) 道徳以外の活動も含めて話し合い活動がどの程度浸透しているのかという質問に対して、「生徒の横糸を紡ぐ」活動と捉え、クラスづくりや教科指導にも積極的に話し合い活動を取り入れているということであった。また、教師が話し合い活動にどのように関わっているのかという質問もあった。授業の中で話し合い活動を行う際には、ねらいや目的にそった話し合いになるよう教師がコントロールしていくことが必要だろうという意見が出た。

3 まとめ

- (1) 田浦中学校の生徒はあいさつがしっかりでき、生徒と教師が強い信頼関係で結ばれている。また、道徳の授業以外の授業でも生徒が活発に意見を述べ、教師が生徒の意見を大切にしている。これらがまさに道徳教育の取り組みの成果ではないか。
- (2) 本研究では、アンケートをとるなどの方法を使いながら、現状と課題をしっかりと把握しながら、目標を段階的に設定し、漸進的に推進しているところがすばらしく、たいへん参考になるところである。
- (3) 本研究では道徳の時間の研究の成果をこれから教科指導の中でも生かしていこうとしているが、このことは、道徳の授業の考え方が教科指導においても役立ち、授業力の向上につながるということを示している。
- (4) 道徳の時間に向かう教師の意識が生徒の意識につながり、生徒の横糸を紡ぐ活動が学び合う姿勢を育て、生徒同士が変わることが道徳の授業が変わることにつながっていくと考えたところが本提案の優れた点である。
- (5) 生徒の実態に合わせて重点項目を決めていく方法もあるが、いずれにしても、道徳教育という縦糸があってはじめて横糸があるということを再認識したい。